

「自然」による啓蒙

20 世紀初頭オーストリア「自然の友」協会の活動から

古川 高子

はじめに

1. 「自然の友」協会成立の背景

2. 「自然の友」協会

3. 協会の発展

おわりに

はじめに

戦間期オーストリアの多くのアルペン協会が競争的登山・スキーを奨励していくなかで、「自然の友」協会 Der Touristen-Verein “Die Naturfreunde”は唯一これを拒否した組織として知られている。会員数 20 万人にもおよぶ大衆組織になったにもかかわらず、「自然の友」協会が個人業績やスピードを競うスポーツを嫌ったのはなにゆえだったのか。

あたかも市場での競争のようにもっぱら最高記録をとることばかりに腐心し、そのために人間を個人主義的にしてしまうブルジョアスポーツに対して、連帯と労働者階級の解放を唱える大衆労働者スポーツが打ち立てられた 1920 年代、社会民主党文化組織としての「自然の友」協会の態度や行動もこのプロレタリア対

抗文化のなかにおいて解釈されてきた¹。しかし、

「自然の友」協会が競争的登山を忌避し始めたのは 1910 年前後であるゆえ、これを対抗文化という文脈のなかだけに位置づけるわけにはいかないだろう。この点を明確にするためには「自然の友」協会の思想や活動を検討して、その基本的性格を明らかにしなければならない。それゆえ、ここでは戦間期を考察の射程にいれながら、協会の設立時から活動方針の転換点（1910 年前後）までの時期に絞ってみていくことにする。

19 世紀末、オーストリア社会民主党員により設立された「自然の友」協会は、その内実を変えながらも現在まで続いている。この協会自体が研究対象とされるようになったのは、労働運動史が組織の文化活動に興味を抱くようになった 1980 年代のことである。そこでは、登山やハイキングを通して労働者の心身増強・健康維持をはかる団体・労働者向け旅行協会として

¹ ラインハルト・クラマー、上野卓郎訳「オーストリアの労働者スポーツ運動」クリューガー・リオーダン編、上野卓郎編訳『論集国際労働者スポーツ』（民衆社、1988）（原著、1985）、109-136；Cf. Reinhard Krammer, *Arbeitersport in Österreich. Ein Beitrag zur Geschichte der Arbeiterkultur in Österreich bis 1938* (Wien, 1981), 140-144.

位置づけられていた²。より専門的な研究は社会学の分野から出されたが、それは「自然の友」協会が工業労働と自然への欲求との間にある緊張関係に折り合いをつけるための社会運動であると捉えていた³。一方、80年代に盛んになった自然保護・エコロジー運動への関心から、「自然の友」が自然開発を促進して経済発展を図ろうとする労働運動と消費を抑制することが必要なエコロジー運動との共存可能性を求めたものだ、と高い評価をあたえる研究もうまれた⁴。他方、90年代半ばには、登山やツーリズム、アルペン協会自体を対象とする研究がドイツやオーストリアを中心にして出版されるようになったが、それらは「自然の友」協会をブルジョアアルペン協会と対極をなす労働者階級のアルペン協会とみなしていた⁵。こうした研究は総じて社会民主党の立場にたつ研究者からなされたものであったため、「自然の友」協会を貴族やブルジョアジーのものだった自然や登山を労働者に解放したアルペン協会とみなして、称賛する傾向が強かった。しかし、

アナーキズム研究の立場からリンゼ Ulrich Linse は「自然の友」の行った自然保護がブルジョア自然保護協会の活動となんら異ならず、ナチスのアーリア的自然保護運動へと連なるものであったことを指摘し、結局、労働運動には社会批判はあったが、自然環境の破壊という視角はなかったと批判した⁶。これに対抗してサントナー Günther Sandner が「自然の友」協会の自然概念についての言説分析⁷を行ない、労働運動にも自然保護に通ずる思想や活動が多く存在したのだ、と反論した。それによると、「自然の友」のイデオログたちは、自然科学的知識とかれらを取り巻く社会を結びつけて考察することを重視していた点では社会ダーヴィニズムに連なる思想をもっていたが、資本主義システムを克服しさえすれば、自然を破壊せずに資源の合理的利用が可能になると考えていたのであった。他方、最近では、「ドイツ（ブ

² Hartman Wunderer, *Arbeitervereine und Arbeiterparteien. Kultur- und Massenorganisationen in der Arbeiterbewegung, 1890-1933* (Frankfurt a.M./New York, 1980).

³ Udo Bense, *Soziale Bewegungen im Spannungsfeld zwischen Industriearbeit und Naturbedürfnis dargestellt am Beispiel des Touristenvereins "Naturfreunde". Inaugural-Dissertation* (Berlin, 1985).

⁴ Jochen Zimmer(Hg.), *Mit uns zieht die neue Zeit. Die Naturfreunde. Zur Geschichte eines alternativen Verbandes in der Arbeiterkulturbewegung* (Köln, 1984).

⁵ Dieter Kramer, *Der Sanfte Tourismus* (Wien, 1983); Rainer Amstädter, *Der Alpinismus: Kultur-Organisation-Politik* (Wien, 1996); Dagmar Günther, *Alpine Quergänge. Kulturgeschichte des bürgerlichen Alpinismus, 1870-1930* (Frankfurt a.M./New York, 1998); Helmuth Zebhauser, *Alpinismus im Hitlerstaat* (München, 1998).

⁶ Ulrich Linse, *Ökopax und Anarchie. Eine Geschichte der ökologischen Bewegung in Deutschland* (München, 1986); 邦訳、内田俊一/杉村涼子訳『生態平和とアナーキードイツにおけるエコロジー運動の歴史』（法政大学出版局, 1990）; ders., *Das Proletariat- Komplize der kapitalistischen Naturausschöpfung?*, in: Jost Hermand (Hg.), *Mit den Bäumen sterben die Menschen. Zur Kulturgeschichte der Ökologie* (Köln/Weimar/Wien, 1993), 119-148; 邦訳、山縣光晶訳「第四章 森にレクリエーションを求めた勤労者たち」『森なしには生きられない ヨーロッパ・自然美とエコロジーの文化史』（築地書館, 1999）; ders., *Die "freie Natur" als Heimat: Naturaneignung und Naturschutz in der älteren Naturfreundbewegung*, in: Wulf Erdmann/Jochen Zimmer (Hg.), *Hundert Jahre Kampf um die freie Natur, illustrierte Geschichte der Naturfreunde* (Essen, 1991), 63-77.

⁷ Günther Sandner, *Die Nature und ihr Gegenteil. Politische Diskurse der sozialdemokratischen Kulturbewegung bis 1933/34* (Frankfurt a.M., 1999); ders., *Zwischen proletarische Avantgarde und Wanderverein. Theoretische Diskurse und social Praxen der Naturfreundbewegung in Österreich und Deutschland (1895-1933/34)*, in: *Zeitgeschichte* (23, Jg.9/10, 1996), 306-318.

ルジョア) 青年運動」と比較するかたちで「自然の友」協会のハイカーたちも自然風景のなかに社会主義的ネイションの形成をみており、その点において「ナショナル」⁸だったのだと主張する研究も提出されるようになっていく⁹。

しかしながら、これらの批判的議論は「自然の友」協会の活動や思想がなにゆえ「ナショナル」であり、ナチスにつながっていったのかを問おうとしていない。「自然の友」協会が19世紀末オーストリア¹⁰において設立された点に注意が払われておらず、後から支部として作られたドイツの組織と区別しないで扱われているのである。そこで本稿は「自然の友」協会の成立を当時オーストリア＝ハンガリー二重君主国において進行していた「国民社会」¹¹形成の動きのなかにおき、左派リベラル知識人によ

て設立された労働者向けの啓蒙団体として捉えることにする¹²。その際「自然の友」協会がオーストリア社会民主党の文化組織であり、また活動の一環として登山を行なう団体であった点に着目し、社会民主党やアルペン協会・登山史との関連性を問う。そうすることによって「自然の友」協会がなぜ競争的登山を拒否したのかに対する回答の端緒が得られるのではな

いかと考えるからである。

以下、第1章では「自然の友」協会を大きな歴史の流れに位置づけるために、二重君主国のライタ以西における資本主義経済の発展によって生じた様々な社会変化を概観する。第2章では「自然の友」協会の設立と活動を検討することによって「国民社会」形成下にあった「自然の友」協会の基本的性格を明らかにする。第3章では「自然の友」協会の組織的発展や政治状況によって生まれた変化を示し、それが「自然」¹³による啓蒙および競争的登山・スポーツの拒否とどう関連していたのかについて考察する。

本稿で利用した史料は「自然の友」協会や各アルペン協会の機関誌・ニュースレターおよび

⁸ 本稿では「ナショナル」という単語を「国民主義的」という意味で用いている。国民主義(＝ナショナリズム)という概念はE.ゲルナーとホブズボウムが用いる「政治的単位と国民的単位が一致すべきであるとする原則」であると理解し、その急進的な形である国粋主義とは区別している。Cf. Ernst Gellner, *Nations and Nationalism* (New York, 1983), 1; 邦訳、加藤節監訳『民族とナショナリズム』(岩波書店, 2000); Eric Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780* (Cambridge, 1990), 9; 邦訳、浜林正夫・嶋田耕也/庄司信訳『ナショナリズムの歴史と現在』(大月書店, 2001)。

⁹ Scott Moranda, *Maps, Markers and Bodies: Hikers Constructing the Nation in German Forests* (<http://www.nationalismproject.org-articles/Moranda-moranda.html>), 2000, 02, 06.

¹⁰ 本稿ではオーストリアという国名を便宜上使用するが、実際はオーストリア＝ハンガリー二重君主国のライタ以西とよばれる地域を指している。

¹¹ オーストリア＝ハンガリー二重君主国はいわゆる多民族国家であり、国内にはいくつかの国民体(二重君主国において国民社会を形成する途上にある諸民族という意味であり、nationalityの訳語。これは小沢弘明「ハプスブルク帝国末期の民族・国民・国家」『国民国家を問う』(青木書店, 1994), 70-86の用法を踏襲している)がそれぞれ国民社会を形成するという動きが出現した。この点に注意を促すため国民社会という言葉に「」をつけている。

¹² クラマーは、「自然の友」協会が生活改革によって労働者を当時の社会への統合しようとした左派リベラルの関心を持っていた、と指摘している(Kramer, *ibid.*, 71)が、本稿では、「自然の友」協会の設立そのものを左派リベラルによるものである、と考える点でクラマーの立場とは異なっている。

¹³ 通常用いられる自然の意味に加えて、他アルペン協会との関係調整のために自然科学の知識を用いるなど、一種の戦略として利用されているため本稿では自然という単語に「」をつけている。

大会議事録である。各協会や党との関係、本部と支部の関係等を知るには十分な史料であろう。

1. 「自然の友」協会成立の背景

本章では「自然の友」協会の成立を社会的に大きく規定していた枠組み、つまり資本主義経済の発展によって生じたオーストリア＝ハンガリー二重君主国内における「国民社会」の成立と啓蒙、大衆政党（社会民主党など）や登山・アルペン協会との関係について考察する。

1-1 「国民社会」の成立と啓蒙

「自然の友」協会を、労働者向け啓蒙団体として捉える際にまず、考えておかなければならないのは、労働者の啓蒙と「国民社会」との関係である。

資本主義経済の発展に伴って高度な分業や職業の不安定性が生じたため、これに十分適応できるような能力をもった人間がまず育成される必要があった。そのためには初等教育の充実が図られなければならず、意志伝達的手段としての言語は統一さなければならなかった。そこに、共通語を使用することによって民族・文化と政治的単位を一致させようとする動きが生じ、この運動を担う人々、つまり資本主義経済を発展させようとするブルジョアジーによって同質な社会、「国民社会」が作り上げられるのである。別言すれば、労働者を啓蒙するということとは資本主義経済の発展に適合的な人間

をつくることであると同時に、かれらを「国民社会」に適合させて、国民化していくことを意味していたのである。

ハプスブルク帝国においても 1850 年代から 60 年代にかけて本格的な工業化・産業化が行なわれ、資本主義経済が発展していた。1867 年のアウスグライヒの後オーストリア＝ハンガリー二重君主国となり、ライタ以西で立憲君主制がしかれると、力を蓄えていたブルジョアジーが自由主義政策を本格的に開始する。株式会社、公共事業、鉄道建設への投資が進む一方で、議会権限が強化され国民を育成するための各種改革（法律、教育、宗教的経済的自由、兵役導入など）が行なわれるようになった¹⁴。

1868 年には義務教育法の改正が行なわれ、これまで 6 年だった義務教育が 8 年に延長されるが、これと前後してブルジョア教育家の手によって労働者啓蒙のための自助や共同体相互扶助にもとづく労働者教育協会が各地に設立された。これらは発展する資本主義経済とそれに基づく「国民社会」に労働者を順応させるための教育を行なっており、労働者自身の力で生活環境や労働状況を改良して労働力の再生産を図らせようとするものだった¹⁵。しかし、1873

¹⁴ 小沢弘明「第六章 二重制の時代」南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』（山川出版社、1999）, 224-226。

¹⁵ 1867 年設立されたウィーン労働者教育協会の定款（1 条および 2 条）には「労働者の精神的物質的利害を守り促進すること、その目的を果たすために庶民的、学問的な講演や授業、図書室の設置、... 歌唱、会話、体育の育成... 就職の斡旋、疾病保険、協会の扶助を行なうこと」と記載されている。Cf. Primus-Heinz Kucher, Zur

年の大不況の後、政治的経済的再編や産業化の進展にともなって、急速な都市化と人の移動が生じ、各都市での住宅不足や労働者街の衛生問題が深刻化する。それまでの自由主義経済政策の失敗が露呈したのである。そこにこうした社会問題を解決し、一般大衆を政治に繰り入れて、国民的統合をはかろうとする大衆政治が出現した。これを担ったのが80年代後半から90年代に成立する大衆政党による運動体であり、その一つが社会民主党による社会民主主義運動であった¹⁶。先に成立していた労働者教育協会はこの時期から徐々にこうした運動に繰り入れられるか、あるいは社会政策を志向するブルジョアジーによって設立される協会へと変化していく。

オーストリア社会民主党は、1888/9年ハインフェルト統一党大会においてインターナショナルな政党であることを主張したが、1897年になると党をドイツオーストリア、チェコスラヴなどの各「国民社会」の形成に適合するような組織に改革し、その動きに積極的に参与していた。

では、社会民主党の啓蒙に対する態度はどのようなものだったのか。それを非常に簡略化し

ていうならば、自らを文化運動として理解し、文化や芸術のオールタナティブを提示することによって、これまでの伝統的なブルジョアジーによる高級な文化をより多くの人々に広げること、つまり労働者を伝統的な民衆文化や慣習的文化から引き離して、啓蒙することを目的にしていた¹⁷。「自然の友」協会もその立場を基本的に踏襲し、「自然」による啓蒙をその目的としている。

しかし、「自然の友」の活動は必ずしも社会民主党の目指す方向とは一致していなかった。まず、協会員を民衆文化や慣習的文化から引き離そうとはせず、それを取り込む形をとっている。さらに、日曜日に遠足活動を行なう「自然の友」協会の設立自体、8時間労働日と普通選挙制の導入を第一の課題にし、日曜日を党や組合の活動日と見なしていた当時のオーストリア社会民主党の方針とはずれていた。その一方で、「自然の友」協会は党を介せずに、ブルジョアアルペン協会が作り上げる高級文化に接近する。後にみるように「自然の友」はクレンツヒェンと呼ばれるダンスパーティをブルジョアアルペン協会のそれと同じように設え、そこに最大の楽しみ見出すなど、支配文化に積極的に同意を与えていた。それは、アルペン協会

Vorgeschichte des austromarxistischen Schul- und Bildungsprogramms: Bildungs- und Schulfrage in der Geschichte der österreichischen Arbeiterbewegung von 1848 bis 1909, in: P.Heintel/N.Leser/G. Stourzh/A.Wandruszka(Hg.), *Die Schul- und Bildungspolitik der österreichischen Sozialdemokratie in der Ersten Republik* (Wien, 1983), 151.

¹⁶小沢「第六章 二重制の時代」, 235-241.

¹⁷ Helmut Konrad, *Arbeiterbewegung und bürgerliche Öffentlichkeit. Kultur und nationale Frage in der Habsburgermonarchie*, in: *Geschichte und Gesellschaft*, 20 (1994), 516. ドイツにおける社会民主党の文化についての態度は相馬保夫「ヴァイマル共和国の労働者文化 研究の現状」『大原社会問題研究所雑誌』No.391 (1991), 7-10 を参照のこと。

風のクレンツヒェンを催すことが、一つのアルペン協会として運営していく上で不可欠な活動だったからである。他にも登山を行なう際に必要な登山用具、小屋や登山道の利用、登山技術、救援、保険等などは諸アルペン協会と共有しなければならず、そのためにはブルジョアアルペン協会との提携・協力は不可欠なのであった。

「自然の友」協会にはこうしてブルジョアアルペン協会にも直接的に接触し、ブルジョアアルペン協会の文化を通して協会員を啓蒙していこうとする面もあった。ではオーストリアにおけるアルペン協会とはどのような存在だったのか。

1-2 戦間期までの登山・アルペン協会史

R.アムシュテッターはその著作『アルピニズム』において、18世紀から現代に至るまでの登山とアルペン協会の歴史を明らかにした。それによればアルペン協会が設立されたのは、啓蒙主義の影響でこれまで一般人が近づくことのなかったアルプスが学問研究の対象となった時期であり、当初それは生物学者や地質学者によるアルプス研究のための学術団体であった。

オーストリアにおいては、1874年にドイツ・オーストリアアルペン協会 *Deutscher und Österreichischer Alpenverein* (以下 DuÖAV と略

記) が設立される¹⁸。そこで行われていたのは、研究対象としての自然科学あるいは文学や美術、芸術と同じレベルでの人格陶冶のための教養としての登山であった。それを中心的に担ったのは、ドイツ語を共通の言葉とする限りにおいて機会の平等を実現し、工業・産業や社会の進歩、公共の福祉をめざす自立した有産市民(教養市民層および知的上昇志向を持った産業市民層)である。かれらは自然科学を学ぶことによってカトリック教会による宗教的支配から個人の解放を目指そうとしていたドイツ系リベラルでもあった¹⁹。

しかし、1873年の大不況の後に生じた社会変化を受けて、上記の資格を満たせば誰でも入ることができた²⁰DuÖAVには様々な傾向を持つ人々が入会するようになる。それはDuÖAVが分化して様々な部局が成立したことを意味していたのである。これまでの費用のかさむ山案内人付きの貴族趣味的登山は時代に合わないものとして批判され、単独・高山・難関登山を目指す登山がとりわけ若者たちによって主張され始めた。速さ、高さ、強さを個人的業績として承認させようとする業績志向型の登山の

¹⁸ イギリスに続いてオーストリアにおいても1862年オーストリアアルペン協会が成立し、それが1869年成立のドイツアルペン協会と統合されて、ドイツ・オーストリアアルペン協会となった。

¹⁹ Cf. Pieter M. Judson, *Exclusive Revolutionaries. Liberal Politics, social Experience, and National Identity in the Austrian Empire, 1848-1914* (Ann Arbor, 1996); 小沢「第六章 二重制の時代」, 224-225.

²⁰ イギリスやスイスのアルペンクラブでは入会に登山業績が必要とされ、また女性にも門戸を開いていない。

開始である。それは旧世代への反抗という面ももってはいたが、むしろ資本主義社会の発展とともに強まった個人主義、競争・記録主義が登山の世界にも入り込んだことを示していた。DuÖAV 内には主として大学生からなる「学術支部ウィーン Die Akademische Sektion Wien (1887 年成立)」ができる一方で、同じ傾向をもつオーストリアアルペンクラブ Der Österreichische Alpen-Club (1878 年成立) (以下 ÖAK と略記) などのいくつかのアルペン協会が設立される。これらのアルペン協会は当時の政治の動き、つまり大衆政治運動の成立に関連していた²¹。シェーネラーらによる国粋主義運動はハプスブルクからの離反・ドイツとの結合を前面に押し出す一方で、ユダヤ教徒の排斥を強く唱えており、この運動を支持していた国粋主義系学生組合と学生登山家のグループ「学術支部ウィーン」とは強く結ばれていた。このような学生組合において指導的役割を果たしていたのが、高山登山を積極的に押し進める学生登山家エドゥワルト・ピヒル Eduard Pichl²²であった。かれは 1890 年にウィーン工科大学に入学し、国粋主義系の学生組合に入るやシェーネ

ラーの支持者となる²³。1895 年に学業を終えて官僚になると、DuÖAV においてその会員の多くが教養市民層のユダヤ教徒からなる最古で最も権威ある「オーストリア支部」に入会するが、そこが「ユダヤ化」しているとして脱退し、同協会のなかでもドイツ系であること、そうあらねばならないことを明言する「学術支部ウィーン」に入り直した²⁴。1890 年代に高山登山の業績を伸ばしたピヒルは 1896 年に、高山登山を専らにし会員を限定する業績志向の ÖAK に受け入れられ、1902 年にはその会長となる。他方、1905 年位から DuÖAV の「学術支部ウィーン」を基盤に反ユダヤ主義活動を繰り広げ²⁵、1911 年シェーネラーによる「ローマからの脱退運動 Los-von-Rom-Bewegung」に参加するなど、国粋主義運動を DuÖAV に導入したのであった。

こうして徐々に賛同者を得たピヒルは第一次世界大戦への参戦を経て、1921 年には「オーストリア支部」にアーリア条項を導入し、これまでこの DuÖAV 内で権威を維持してきたユダヤ教徒登山家たちを「ドナウラント支部」に隔離した。その後 1924 年には協会自体からユダヤ教徒を追い出して、DuÖAV での地歩を固める。この動きと軌を一にして、敗戦によって失った南ティロールの失地回復運動を盛んに行

²¹ キリスト教社会運動においてはルエーガーがその後援者となった「オーストリアツウリストクラブ」や「キリスト教労働者ツウリスト協会」(1908 年設立)、社会民主主義運動には「自然の友」協会といった具合である。Cf. 小沢「二重制の時代」, 235-241。

²² (1872-1955) 建築家の息子、実科学校卒業後、大学で化学を修める。技師・官吏。のちウィーン護国団の指導者、登山作家。

²³ Die Deutsche Lesehalle という名前の学生組合 (Amstädter, *ibid.*, 161)。

²⁴ 1890 年の年報にそう謳っている (Amstädter, *ibid.*, 74)。

²⁵ 1907 年「学術支部ウィーン」にアーリア条項を導入する。

うと同時に、山岳防衛思想を主張して、若者からなる山岳防衛体操協会「エーデルヴァイス Das Edelweiß」を結成させた。これは軍隊式の訓練と登山を組み合わせて政治的闘争を行う集団で、ナチスの「ドイツ軍団 Die Deutsche Wehr」と密接な関わりをもっていた²⁶。

ピヒルは政治的にもイタリア向きのドルフス独裁政府とは対立し、ナチスと結ぶ方向を採る。DuÖAV には成立当初から政治家、高級官僚や資本家が属していたために、そこで繰り広げられる協会政治はより大きな政治に影響を与えており、敗戦後、オーストリアが観光業以外には、よって立つべき産業がなくなっていることはさらにその重要性は増していた。一種の利益団体となっていたのである。1938 年アンシュルスの際に、シューシュニツク Kurt Schuschnigg とヒトラーとの会談を斡旋するザイス・インクヴァルト Arthur Seyß-Inquart やインスブリック大学学長のクレールベルグ Rainmund Klebelsberg はともに DuÖAV の会員であり、ピヒルはかれらを味方につけていたのであった。

アムシュテッターによれば、こうしたアルペン協会とナチスとの結びつきは現実政治のレヴェルばかりではない。登山という人間の文化的営為自体にナチスと結ばれる積極的契機があったという。というのは、貴族趣味的な登山から、より難易度の高い山を自力で登り、死の

危険を冒して自らの体力と精神力の限界まで進むのを是とする登山へと変遷する過程で、登山家たちの間では山に絶対的価値が置かれる傾向が生じ、山を征服するのは強い人間であり、英雄であるといった称賛が生じたからである。その背景には山においても強きものが勝ち残るのだ、という一種の社会ダーヴィニズム的発想があり、それへの信仰が登山を一つの世界観に、そして宗教的なものにしていった²⁷。こうした宗教的英雄絶対視は自ら英雄になろうとする者たちの競争、つまり記録を求める競争を生む。その競争とそれに勝利したものへの報酬が外部から保証されたとき、登山家は命を賭けるという危険を自らの責任で決定しなければならない不安からは解消される。その制度的保証と与えたのがナチスであったという²⁸。

戦間期オーストリアの各陣営（キリスト教社会党、社会民主党、ドイツナショナル）はそれぞれ若者中心の高山登山向けの山岳グループを結成するが²⁹、先に挙げた「エーデルヴァイス」もその一つであった。「自然の友」協会も 1919 年に「アルピニステンギルド」を作る。これは登山に関する理論および実践教育を若者たちに施す一種のスクールであり、高山登山を中心に活動していた。1934 年にドルフス独裁権下で「自然の友」協会が禁止解散されると、表向きは独裁体制下のアルペン同盟に加わり

²⁷ Amstädter, *ibid.*, 108-109; 117-120; 123-126; 135-138.

²⁸ Amstädter, *ibid.*, 389-418,

²⁹ Amstädter, *ibid.*, 251-254.

²⁶ Amstädter, *ibid.*, 255.

ながら、その一部は抵抗活動を行なった³⁰。他方で不合法ナチスに鞍替えする登山家も出現する。ヒトラー支配下のアイガー北壁登山隊（1938年）に加わったカスパレク Fritz Kasperek が代表的人物である³¹。ヒトラーはアイガー北壁を征服したものには金メダルを与えると約束したが³²、カスパレクもその恩恵に与っている³³。

オーストリア社会民主党陣営の労働者が、地域差はあるとはいえ、ナチズムへ共感していった事実および原因は既に明らかにされており³⁴、さらにナチス支配下で士気高揚のために職業上の技術コンテストがさかんに行われていた³⁵という事実を考えあわせると、登山家たちに限定したうえで、業績目的の登山とそこに生じる競争が若者たちに積極的にナチスに入る契機を与えたのだ、と主張するアムシュテッターの

見解は妥当とみなすことができるだろう。

「自然の友」協会が設立された 1895 年はオーストリアの登山史のなかでは、山案内人なしの高山登山・競争的スポーツが発展した時期に該当する。それゆえ「自然の友」も設立当初は競争的スポーツ・登山について否定しておらず、むしろ積極的に進める方針であった。それを否定するのは、DuÖAV「オーストリア支部」に属する登山家ラマーEugen Guido Lammer³⁶の文章を 1911 年 3 月雑誌『自然の友』³⁷に掲載してからである。そしてその態度は戦間期を通して変わらず、1932 年まで続く。では、この 1911 年時点で「自然の友」協会にいかなる変化が起こったのか。それを検討する前提として次章では協会の基本的性格をその設立者の思想と協会の活動から規定していく。

2. 「自然の友」協会

2-1 「自然の友」協会の設立と設立者

「自然の友」協会は、小学校の教師ゲオルク・シュミードゥル Georg Schmiedl とその山歩き仲間であった商人シモン・カツツ Simon Katz が 1895 年 3 月 17 日にヴィーンの森を散歩しながら「労働者と一緒に山歩きをするためのグループを作りたいね」と話し合ったところから始

³⁰ Manfred Pils, "Berg frei". 100 Jahre Naturfreunde (Wien, 1994), 141-143.

³¹ Ibid., 330; Eduard Rabofsky, Politischer Einsatz in den Bergen, in: *Hundert Jahre Kampf um die freie Natur*, 101.

³² Amstädter, *ibid.*, 419.

³³ Rabofsky, *ibid.*, 101.

³⁴ Helmut Konrad, Social Democracy's Drift Toward Nazism before 1938, in: F. Parkinson (ed.) *Conquering the Past. Austrian Nazism Yesterday & Today* (Detroit, 1989), 110-124.; ders., Zur Österreichischen Arbeiterkultur der Zwischenkriegszeit, in: F. Boll (Hg.), *Arbeiterkulturen zwischen Alltag und Politik. Beiträge zur europäischen Vergleich in der Zwischenkriegszeit* (Wien/München/Zürich, 1986), 89-100. ここでは社会民主党もナチスも、アンチオーストリアファシズム、反教権の態度をとり、ドイツナショナル・社会主義を主張していた点で共通していた。また、とりわけ失業者が多くでていた若者にとってはナチスによるドイツでの経済的成功のプロパガンダは魅力的であった。さらに、オーストリアファシズム体制下において、同じ監獄仲間であったことも、その一因として挙げられている。

³⁵ デートレフ・ポйкаート（木村靖二/山本秀行訳）『ある近代の社会史 ナチ支配下のくふつうのくふつうの日常』（三元社, 1991）（原著, 1987）, 167-169.

³⁶ (1863-1945) 登山家、登山作家、ギムナジウム教授。単独登山により有名になる。主著『若き泉 孤独な探求者による登山と高山思想』Jung Born. *Bergfahrten und Hohengedanken eines einsamen Pfadsuchers* (München, 1923).

³⁷ *Der Naturfreund. Mitteilungsblatt des Touristenvereins "Die Naturfreunde"*. 以下 *Der Naturfreund* と略記。

まった。シュミードゥルはその意思を同年3月22、23、24日付け社会民主党の日刊紙『労働者新聞』の広告欄に掲載する。それに対しておよそ30通の返事が届き、そのなかには「自然の友」協会初代会長となる金属工親方アロイス・ローラウアー Alois Rohrauer とその息子で哲学を学ぶ大学生のヨーゼフ Josef、そしてローラウアー家に下宿していた法学部の学生カール・レンナー Karl Renner による三人連名の手紙もあった。3月28日には約40名がIX区のベクルガッセにあるロカール(居酒屋旅館)「銀の泉で Zum silbernen Brunnen」で行われた初会合に参加する。そこで協会設立委員会が組織され、ローラウアー(父)、パン職人アントン・クロイツァー Anton Kreuzer、植字工レオポルド・ハッピシュ Leopold Happisch の三人がそのメンバーとなった。創立者であるシュミードゥルとカツがそこに入っていないのは、小学校教師のシュミードゥルが、フライデンカー(自由思想家・無神論者)としての行動によって警察当局から地区学校委員会を通して叱責を受けた経緯があったからであり、カツは社会民主党員にならねばならない幹部となることを避けたからであった³⁸。以降、シュミードゥルは協会幹部としては現れてこないが、「自然の友」協会のイデオログとしての役目を果たしていく。

シュミードゥルは1855年教師を父に、シュレジェン(シロンスク)で生まれた。オルミュッツ(オロモウツ)のギムナジウムを出てからウィーンの師範学校を卒業し、1876年ウィーンVIII区の小学校の教師となった。子供たちを教える傍らでウィーン天文台のグラザー Eduard Glaser の助手をしながら、「理性の自由教会 Freie Kirche der Vernunft」を創設したシュヴェラ Eduard Schwella に近づき、一元論的思想を受け入れた。かれはフライデンカーの雑誌に記事を書いたり、地区の学校集会で「新しい世界観の必要性」という題の講演を行なうなど、徐々に反カトリックの立場を明確にすると同時に、社会民主党のサークルにも近づき、その雑誌に寄稿し、またいくつかの労働者教育協会で講演活動を行っている。ヴィクトル・アードラー Victor Adler に会うのもそうした講演が行われたときであった³⁹。アードラーがシュミードゥルの講演内容に賛意を与えたとき両者の付き合いが始まったのである。シュミードゥルはアードラーの家に招かれ、そこでかれはさま

³⁸ それは居酒屋旅館「緑の狩人 Grüner Jäger」で行われた講演であった。その出会いの時期は、正確には定められないが、「当時は例外法(社会主義者鎮圧法のこと。ウィーンならびに下オーストリアでは1884年1月30日から1889年7月31日まで)の時代であった」という記事(*Der Naturfreund*, 1925, H.9/10, 139)、アードラーが1886年11月に第1号が発刊される“*Gleichheit*”の編集のための下準備にシュミードゥルを参加させていること、さらに1887年1月、シュミードゥルをドイツ社会民主党との密接な協力を促進するためにチューリヒに送っていること(Herbert Steiner, *Die Arbeiterbewegung Österreichs 1867-1889. Beiträge zu ihrer Geschichte von der Gründung des Wiener Arbeiterbildungsvereins bis zum Einigungsparteitag in Hainfeld* (Wien, 1964), 268) などから考えて1884年以降1886年までの間であろう。

³⁹ Schügerl, *ibid.*, 35-37; Pils, *ibid.*, 30-31.

ざまな社会民主党系の人々に出会い、かれらとの交流の輪を広げた。アードラーの薦めで、シュミードゥルは1886年11月創刊の新聞『平等 Gleichheit』の発刊準備に関わっている⁴⁰。これはそれまで「自由を通して教養を」⁴¹と主張する急進派と「教養を通して自由を」⁴²と唱える穏健派に分裂していたオーストリア社会民主党を統一の方向に導いたと評されている新聞であり⁴³、労働者の諸権利を主張してその実現をはかりながら、労働者に知識や教養を広め、啓蒙することを主張していた⁴⁴。シュミードゥルもその思想を共有している⁴⁵。

2-2 シュミードゥルの活動と「自然の友」

まずシュミードゥルは、かれ自身の職業であった小学校の教師、特に劣悪な状況の下にあった下級教師の権利擁護運動を推進する。かれが属していた⁴⁶ウィーンの教師協会「民衆学校 Die Volksschule」で行った「非常勤教師・下級教師

の悲運、およびその授業への影響」という講演では「収入が少ない人々は教師にはなれない」と主張しており、また、かれらの権利要求運動の中心となる「ウィーン教師中央協会 Der Zentralverein der Wiener Lehrerschaft」の設立に際しては若き下級教師たち⁴⁷を支援してその礎を築いている⁴⁸。

こうして「労働者としての教師」の権利を主張する一方で、シュミードゥルはブルジョア層による社会政策研究のサークルにおいても指導的役割を果たす。思想史の専門書では「自然の友」創立者としてではなく、むしろ当時の「社会政策家 Sozialpolitiker」として紹介されている⁴⁹。かれらは大衆政党による社会運動とは別の立場から19世紀末に生じた各種の社会問題を解決しようとした人々である。社会政策家は基本的に私有財産を否定せず、資本主義経済の枠内で「自由、平等、兄弟愛」という理想を実現する進歩的政治としての社会主義を主張し、資本家階級の自由は最貧困層を救済するために制限される必要があり、国家はそのための具体

⁴⁰ シュミードゥルは自らこの新聞に「Unus」という匿名で記事を書いており、これをアードラーは「わたしは一語たりとも削除する気にはなれない。もちろんその文章が押収されることはわかっていたが」といわせるほど、シュミードゥルをかっていた（*Der Naturfreund*, 1925, H.9/10, 139）。

⁴¹ 階級闘争の結果としておこる政治的転覆の後にはじめて広く教養が与えられると考える人々の主張。

⁴² 教養をまずもって優先させるべきで、これがなければ社会改革も不可能であるとする人びとの主張。

⁴³ Steiner, *ibid.*, 216.

⁴⁴ *Die Gleichheit*, 1887, 4/30, Nr. 19, 2.

⁴⁵ 1888/89年ハインフェルトで行われたオーストリア社会民主党統一大会にもシュミードゥルは参加している。

⁴⁶ *Gedenkbuch zum 25jährigen Bestande des Ersten Wiener Lehrervereines "Die Volksschule" 1863-1888* (Wien, 1889), 311. これによるとシュミードゥルは協会に1877-1888年の間、所属している。

⁴⁷ Seitz, Enslein, Sonntag といった人々での中にオーストリアの教育行政に大きな影響を及ぼすことになる。手塚甫「オーストリアにおける近代教育改革運動史序説-グレッケル教育改革前史として-」『北里大学教養部紀要』28号（1994）, 1-22; 同「オーストリアにおける教育改革運動と教員の組織化-1897年ウィーン市教育委員選挙をめぐる-」『社会科学討究』40-3（1995）, 249-278; Hajime Tezuka, *Die Wiener Junglehrerbewegung. Eine Studie zur Schulgeschichte in den letzten Jahrzehnten der Donaumonarchie*, in: *Studien zur Wiener Geschichte* (Wien, 1985), 113-155.

⁴⁸ Leopold Happisch, *Geschichte der Naturfreunde 1895-1934*, unveröffentlichtes Manuskript (Wien, 1936-1940), 218.

⁴⁹ Albert Fuchs, *Geistige Strömungen in Österreich 1867-1917* (Wien, 1978), 141.

的救済を行なうべきだと考えていた。中心となった人々は左派リベラルのインテリ層や小ブルジョアジーであるとされ、シュミードゥルもその一人としてみなされている⁵⁰。1891年にシュミードゥルはペルナーシュトルファー Engelbert Pernstorfer らとともに、イギリスのフェビアン協会を真似て「ヴィーンフェビアン協会 Die Wiener Fabier-Gesellschaft」を創設した⁵¹。その機関誌となった『ドイツ人の発言 Deutsche Worte』は1881年ペルナーシュトルファーがシェーネラーとともに創刊した雑誌であり、V. アードラーも投稿するなど、当時のドイツ系リベラル急進派の理論誌でもあった⁵²。そこでは主として社会的貧困や社会政策、教育・女性問題や売春、アルコール中毒など社会衛生についての問題が論じられていた⁵³。かれらに対してはフクスが「その傾向は社会主義的というよりもブルジョア・ラディカル」⁵⁴、F.シュタドラーが「革命的ではない急進ブルジョアの社会改革

家」⁵⁵という評価を下しているが、もちろんシュミードゥルもその例外ではない。

かれが「自然の友」協会設立を考案した一つの理由は、この社会衛生的観点にたつて、労働者の精神と身体を遠足や登山を通じて強靱にすること、余暇を飲酒やカード・九柱戯などの遊びで費やすことなく⁵⁶、自然にふれることによって自然美に対する感覚を呼び起こし、人間の品性を高め、文化の程度を上げることであった⁵⁷。

また、シュミードゥルは既に述べたように、フライデンカーであり、神の存在を否定する世界観の持ち主である。それは科学によって世界を合理的に把握しようとする一元論に基づいていた。カトリック勢力の強かった二重君主国において教会と国家・教育の分離を主張することは急進派リベラルにとっては当然のことであったが、一元論者は社会のダーヴィニズム的進歩発展を信奉していた。その土台は自然科学の知識であり、シュミードゥルは教師職の傍ら教師向け教育機関や博物館、研究所に通い、博物学、植物学、鉱物学、生物学に加えて社会学も学んでいる⁵⁸。その知識を労働者に広めて、自然科学を理解できる人間を育てること、これ

⁵⁰ Fuch, *ibid.*, 133-135.

⁵¹ フェビアン協会の創設者たちは他に Otto Mittelshöfer (会社の副会長)、Dr. Richard Faber (工場経営者)、Dr. Ritter von Fürth (ヴィーンのゲマインデ参事会員) がいた。

⁵² Helmut Rumpler, *Eine Chance für Mitteleuropa. Bürgerliche Emanzipation und Staatsverfall in der Habsburgermonarchie* (Wien, 1997), 489-490. ルンブラーは『ドイツ人の発言』を新聞としているが、これは雑誌である。

⁵³ Doris Byer, *Rassenhygiene und Wohlfahrtspflege. Zur Entstehung eines sozialdemokratischen Machtdispositivs in Österreich bis 1934* (Frankfurt a.M./New York, 1988), 49-59. このフェビアン協会のサークルから「社会政策党」が生まれ、シュミードゥルと知己であるオフナー Julius Ofner やクロナヴェッター F. Kronawetter、フィリポヴィッチ E. Philippovich は 1896 年下オーストリア州の議員となり、オフナーとクロナヴェッターは 1901 年帝国議会議員に選出されている (Fuch, *ibid.*, 141-142)。

⁵⁴ Fuchs, *ibid.*, 141.

⁵⁵ Friedrich Stadler, *Spätaufklärung und Sozialdemokratie in Wien 1918-1938. Soziologisches und Ideologisches zur Spätaufklärung in Österreich*, in: F. Kadranoska (Hg.), *Aufbruch und Untergang. Österreichische Kultur zwischen 1918 und 1938* (Wien, 1981), 442.

⁵⁶ *Der Naturfreund.*, 1920, Nr.5, 69-70.

⁵⁷ *Der Naturfreund*, 1897, Nr.1, 1.

⁵⁸ Happisch, *ibid.*, 218; *Der Naturfreund*, 1920, Nr.5, 69-70.

が「自然の友」設立のもう一つの理由であった。かれは自然界の出来事を自分の目で観察し、評価できて初めて「誤りから真実を導き出すことができるようになる」⁵⁹と考えていたのである⁶⁰。

2-3 「自然の友」協会の活動

1894年3月のオーストリア社会民主党第四回党大会では、V.アードラー主導のもとに8時間労働日と普通選挙制の導入のために全党あげて努力すること、という決議が行なわれており、「自然の友」協会が設立された1895年はこの目標を達成するために、労働者個々人の協力が仰がれていたときであった⁶¹。IX区のシュヴァルツシュパニア通りにあった『労働者新聞』編集用ロカールの一部屋でシュミードゥルがV.アードラーに、「自然の友」協会設立の広告を出すのに、「自然2080」という宛名で到着するかどうか尋ねた際、V.アードラーが「君は頭がおかしくなったのか」と答えたというエピソードが残る⁶²ほど、党指導部にとって「自然の友」の設立は驚くものだった。シュミードゥルが企図していた遠足は、「階級のための活動を放棄

して、山や森へ行くこと」「労働者の義務を怠る」ものだとされて非難されていたのである。そのような声を論破したのがカール・レンナーであった。わずかな週末の余暇時間に自然のなかに遠足することで、労働者は余暇時間が貴重なものであることを認識し、より多くの自由時間を求めて8時間労働日や有給休暇を要求するようになるのだ、と主張したのである。こうして協会の設立に反対した党指導部を説得し、その承認を得て1895年9月16日正式に「自然の友」協会が設立された。V.アードラーやペルナーシュトルファーも設立されてまもなく入会している⁶³。

協会のバッジもレンナーが考案したが、それは山を背景にアルプスシャクナゲをはさんで握手するデザインで、回りは「手に手をとって、山野を通して Hand in Hand, durch Berg und Land」の字句が縁取られている。握手は労働運動における連帯を表象したもので、これが遠足の際にも有効であることを強調したものであった⁶⁴。このようにして「自然の友」協会は党との関係を調整しながら出発したのであった。

⁵⁹ *Der Naturfreund*, 1897, Nr.1, 2.

⁶⁰ シュミードゥルは1912年に社会教育協会 Sozialpädagogische Gesellschaft. Vereinigung für Volks- und Jugenderziehung を設立し、自らその会長になることでこのような思想を実行に移している。一元論的世界観を労働者、とりわけ青年に対して施し、各種の生活改革運動の実践進歩的教育を推進しようとした(F.Stadler, *ibid.*, 456-461)。

⁶¹ Ludwig Brügel, *Geschichte der österreichischen Sozialdemokratie, Vierter Band: Festigung der Organisation. Vom Privilegienparlament zum Volkshaus (1889 bis 1907)*(Wien, 1923), 267-274.

⁶² Gerald Schügerl, *80 Jahre Naturfreunde Österreich*(Wien, 1975), 36.

⁶³ Bensel, *ibid.*, 32.

⁶⁴ Pils, *ibid.*, 23.



「自然の友」協会章

(1) 遠足

では、具体的活動としてはどのようなことが行なわれていたのか。社会衛生という観点から

「自然の友」協会がおこなったのはヴィーンおよび各支部のある諸都市近郊への遠足、娯楽の機会提供ならびにオーストリアを中心にした⁶⁵山々への登山である。遠足は一日か半日、列車を利用して郊外に出て、そこからそれほど高くない 1000m 位の山に登った。参加者は、通常数十名、多いときには百名以上に及び、少なからぬ女性や子供も含んでいる⁶⁶。「自然の友」協会のバッジができるまでの何回かの遠足では『労働者新聞』を携えていることが会員の印であり、その点からして集まるのは社会民主党支持者に限定されていた。元来こうした遠足は貴族・ブルジョア階級の「お散歩」として始まったものだが⁶⁷、労働運動の活動においても、禁止さ

れていた集会や演説が「遠足」と称されて郊外で行なわれており、これに労働者合唱協会も加わるなど、娯楽の要素も含まれていた⁶⁸。「自然の友」協会の行なっていた遠足もとりわけ初期の時代には娯楽の意味合いが強い。たとえば毎夏恒例の家族遠足では、駅から催しものが行われるロカールまで楽隊の音楽に伴われながら装飾を施された山車に乗っていき、ロカールの庭では九柱戯、闘鶏、袋かぶり競争、徒競走、自転車競技などが催され、それぞれ一等には賞金がでた。建物内ではアルペンダンスやコンサートが行なわれ、最後に集合写真を撮るのが慣わしであった⁶⁹。こうした遠足のなかには 1898 年の夏から開始された、年に一度の 2-3 泊の大きな旅行もあった。ザルツブルクやインスブリュックなどが目的地とされ、1 回平均 500 名以上が参加し、鉄道会社による特別列車仕立てで実施されていた⁷⁰。

多くの、しかも貧しい人々でも参加できるように協会内に貯金や分割払いで行ける工夫もこらされていたが⁷¹、こうした旅行に参加でき

⁶⁵ 1905 年以降になるとドイツやスイスに支部が設立され、そこではもちろんドイツやスイスの山々への登山を行なっている。

⁶⁶ たとえば 1900 年 5 月 20 日の Wachau への遠足では 92 名の参加者中女性性は 30 名だった (Der Naturfreund, 1900, Nr.6, 55)。

⁶⁷ Cf. Gudrun M. König, Eine Kulturgeschichte des Spazierganges. Spuren einer bürgerlichen Praktik 1780-1850 (Wien/Köln/Weimar, 1996)。

⁶⁸ Steiner, Die Arbeiterbewegung Österreichs, 211-213, 237. メーデーについては Stefan Riesenfelder, "Leuchtendes Rot über dem wallenden Körper der Masse". Zur kulturellen Selbstinszenierung der österreichischen Arbeiterbewegung um die Jahrhundertwende, in: K. Kaser/K. Stocker (Hg.), Clio's Rache. Neue Aspekte strukturgeschichtlicher und theoriegeleiteter Geschichtsforschung in Österreich (Wien/Köln/Weimar, 1992), 203-242 参照のこと。メーデーに祝祭と祭典の双方の意味が含まれていたことを述べている。

⁶⁹ ヴィーン中央によるヴォルフスグラベン家族遠足 (Der Naturfreund, 1897, Nr.1, 2; 1899, Nr.8, 61)。

⁷⁰ 1899 年の旅行では 600 枚以上の切符が販売された (Der Naturfreund, 1899, Nr.8, 60)。

⁷¹ Der Naturfreund, 1899, Nr.6, 41。

る会員はハッピーシュが述べているように「主として知識人層、良い収入を得ている労働者、私企業に勤めている会社員、そして階級の状態を認識し、自らも労働者と感じている人々」であった⁷²。

遠足や登山を終えた後には必ず酒を飲む場が設けられていた。『自然の友』誌には飲酒をよくないものとして節制を促す記事⁷³もあるが、節酒が守られた気配はない⁷⁴。協会の方針としては節制の方を向いていたが、実際にはそれを厳しく制限する方策は採られていなかった。この点で、アルコールを資本主義がもたらした悪、人間の退化を招くものとして非難した V.アーダー⁷⁵や 1905 年ヴィーンで設立された労働者節制協会⁷⁶が採った方針と「自然の友」協会のそれとは異なっていた。

ところで、「自然の友」は定款に協会の目的のひとつとして「民衆生活と民衆習俗の知識を広めること」を設立当初から挙げている。それを実現するためであったのだろう。「自然の友」協会は毎夏ヴァハウ渓谷で開かれる夏至祭に

遠足とかねてツアーを企画している。「古から伝えられたすばらしい民衆の祝祭 Volksfest をまだみたことのない人々はこのよい機会を利用するように」⁷⁷とってこのツアーへの参加を促すのである。1900 年にはカトリック勢力の強いメルク市が夏至祭を「ひどくゲルマン的である」として中止するよう勧告した事件がおこるが、「自然の友」協会は収入の減少を嫌ってその中止命令に異議を唱えたメルク市の実業家らの側につき、『自然の友』誌に非難の文章を載せる。そしてようやく開催された祭りに協会員を送りこみ、その詳細な参加記を同誌に掲載している⁷⁸。宗教という点において、「自然の友」はカトリック教会に対して一線を画し、科学的理性による世界観を広める方針を採っていた。そこから反カトリック、親「ドイツナショナル」という方向性をもっていたと考えられる。他方、市の実業家の味方をするのは観光促進のためであり、同時にそれは「民衆習俗の知識を広めること」という協会の目的にも適っていたのであった。つまり、観光による啓蒙は「ドイツナショナル」なものにも向かうのである。

しかし、かれらの意識のなかでは自分たちは「ナショナル」ではない。現在のケルンテン州とスロヴェニアの国境地帯にあるカラヴァンケンに住むスロヴェニア人に対して「かれらは平和的で、まだナショナルな唆しには染まらず

⁷² *Der Naturfreund*, 1907, Nr.4, 74. 一般の工場労働者がこうした旅行に行けるようになるのは有給休暇や通常労働日が確立する戦間期になってからである。

⁷³ アルコールは筋肉を弱体化させる、という学会報告が掲載されている (*Der Naturfreund*, 1899, Nr.3, 21)。

⁷⁴ 登山を終えて、「列車をまつ間に駅でみなで一杯やった」とか、登山をする前に「まず一杯」という内容の記事はこの時期を問わず多数散見される(一例として、*Der Naturfreund*, 1900, Nr.8, 75)。

⁷⁵ アルコール問題についてのアダーの見解は Victor Adlers Aufsätze, Reden und Briefe, 3. Heft (Wien, 1924), 9-66 を参照。

⁷⁶ 節制協会については Byer および Sandner を参照のこと。

⁷⁷ *Der Naturfreund*, 1899, Nr.5, 43; 1900, Nr.5, 43.

⁷⁸ *Der Naturfreund*, 1900, Nr.7, 56; 67.

に残っている民衆 Volkstum だ」⁷⁹と述べている。つまり、スロヴェニア人であることを強く訴える「ナショナル」なスロヴェニア人は悪く、それに訴えないでおとなしくしているスロヴェニア人はよい、と解釈するのである。そこに「ドイツ系」の支配意識が表れていた。

このように「自然の友」協会による実際の遠足活動には、社会衛生の改善という所期の目的とは異なって、娯楽の要素が強く存在し、「民衆生活と民衆習俗の知識」を広げる啓蒙に力点がおかれていた。そうした知識は観光を通して得られるものであり、その対象には「ドイツナショナル」なものも含まれているのであった。

(2) 娯楽

さて、「自然の友」協会は「社交の場」、娯楽の場として、さらには協会の様々な集会活動を行う場としてのロカールをもっていた⁸⁰。大都市ヴィーンでは本部の他にX区や西地区⁸¹などといった地区毎に、そして地方都市に広がった支部にもそれぞれのロカールがあり、毎週決まった曜日に飲食をともにしながらの会合がもたれていた。

このような各支部のロカールでは年に一度の最大行事クレンツヒェンをはじめとして各

種のパーティが行われた。その入場料が協会の財政に潤いを与えたことは間違いないとしても、こうした催事にはいくつかの興味深い特徴があった。まず、会場の飾り付けである。遠足や登山を行なう山を模して、樅の木が据付けられ、アルム小屋が設けられ、道路標や遭難者のための慰霊塔が建てられた。背景はアルプスの山々を描いた絵画であり、その足元にはピッケルやザイルが置かれていた。クレンツヒェンは会員以外にも開かれてはいたものの、一つだけ制限があった。それは着ていく衣装に関する規定である。「アルペン（＝山岳農民）の衣装またはツーリストの衣装、もしくは夜会用の服を着用すること」⁸²という文言が宣伝用パンフレットに必ず記載され、実際それに参加する人々の「半分はアルペンの衣装を着ていた」のであった。「様々な州と谷の衣装を着けており、なかには独創的な人物を模した衣装もあったが、その多くはティロール地方の衣装であった」。酪農家の女性を模した女主人が「新鮮な牛乳」を振舞うなか、シューブラターと呼ばれるアルペンドダンスや寸劇が行われた⁸³。この寸劇は協会員によって演じられたが、出し物はほとんど決まっていた。その中の一つは「密猟者」と呼ばれるもので、鹿を密猟した男が森林官と警察に捕まる、という内容である。それを面白おかしく演じ、観衆はそれを会のクライマックスとみ

⁷⁹ *Der Naturfreund*, 1900, Nr.1, 1.

⁸⁰ Helga Zoitl, "...Massen, die in Bewegung und in Bewegung gebracht werden sollen". Anmerkungen zur Organisationsfrage, in: E. Fröschl/M. Mesner/H. Zoitl (Hg.), *Die Bewegung. Hundert Jahre Sozialdemokratie in Österreich* (Wien, 1990), 86-88.

⁸¹ ヴィーンでは年毎の会員増加に伴い行政区毎に一軒設けられるようになっている。

⁸² たとえば、*Der Naturfreund*, 1899, Nr.1,7; 1900, Nr.1,7.

⁸³ *Der Naturfreund*, 1898, Nr.10, 71; 1900, Nr.10,77.

なして最大の拍手を送るのだった⁸⁴。

ここでは、基本的に都市住民である協会員が山での体験を身近なところで再現し、それを娯楽の題材にしている点について考えてみなければならない。山やそこでの体験を模し、その衣装を着け一つの場を共有するという行為自体、「登山」「山へ行く活動」に一つのアイデンティティを求め、自分の行動に意味を見出しそれを解釈している⁸⁵、と考えられる。そこにみられる「山の模倣」は「自然の友」協会に限られたものではない。ブルジョアアルペン協会でも、またキリスト教社会党の労働者向けアルペン協会においてもほとんど同じ内容の会が催されている。つまり、これは、「山へ行く・行ける人々」が分け持つ意識であり、自分の行っている行為が有意味で、さらには自分もアルペン協会の一員なのだという主張としてみなしうる。他の場合、たとえばオーストリア民俗博物館に訪れた協会員が、そこは「山の住人の生活や風俗習慣を垣間見ることができ、アルム小屋ですばらしい時を過ごしたことを思い出せるゆえ、訪問の価値がある」⁸⁶として訪問を薦めている点からも山での経験を肯定的に捉え再確認していることがわかる。

「自然の友」協会の活動、たとえばヴィーン本部が主催する最大のクレンツヒェンにおい

て示された意識が、通常のハイマート協会のそれと異なるのは、地方色が強く現れていないという点であった⁸⁷。協会員が着用する山岳農民の衣装は地域特定のものではない。協会は様々な地域の衣装を許容している。課されていたのは、「山」のもの、という限定だけである。同様に民族博物館訪問においても、思い出せるのは「山」であり、特定の山ではなかった。

かれらの意識のなかで再現される「山」は定まったものではなかったが、協会が登山の対象として考えていたのは、その定款に活動目的として「オーストリア＝ハンガリー二重君主国の自然の知識を会員に伝え、これを知る機会を与えること、自然への愛情を呼び起こすこと」と挙げられているように、二重君主国の山々であった。実際、「自然の友」協会が遠足や登山で訪れる山は、資金面や取れる休日数といった点から国内の山に限定されていた。また、「自然の友」協会の各支部は主としてヴィーンの「自然の友」協会本部の会員が移転先で設立し、それが別の場所でも繰り返されて発展したという経緯もあって、国外においてもドイツ語を話す人々が構成されていた。一種のドイツ語圏ハイマート協会となっていたのである。この点から、かれらの意識上での山は「二重君主国の山」であり、同時に「ドイツ語を話す人々が多く登

⁸⁴ *Der Naturfreund*, 1899, Nr.5, 36; 1900, Nr.5, 44.

⁸⁵ E.アウエルバッハ・篠田一士・川村二郎訳『ミメシス ヨーロッパ文学における現実描写(下)』(ちくま学芸文庫, 1994)(原著, 1949), 468-470.

⁸⁶ *Der Naturfreund*, 1899, Nr.7, 42.

⁸⁷ ドイツ・プファルツァー地方のハイマート協会では「プファルツァーの衣装」が専ら求められていた。Cf. Celia Applegate, *A Nation of Provincials. The German Idea of Heimat* (Berkeley/Los Angeles/ Oxford, 1990), 83-84.

る山々」であったと考えられる。

では、かれらにとって「民衆」(＝山の住人)はどんな存在だったのか。第一項で述べたように「自然の友」協会にとっての「民衆」は観光の対象であり、啓蒙の手段としての存在であった。そういう「民衆」は善い「民衆」でなければならない。それゆえ実際にかれらが山地で地元の「民衆」に触れて、その「民衆」がかれらの言うことをきかない「民衆」であることが判明すると、これまでの善良な「民衆」が突如として「何も知らない愚か者で、嘘つき」となり、「啓蒙しなければならない」⁸⁸対象へ変化するのである。

他方、クレンツヒェンなどの催し物において「民衆」が繰り返し演じられることによって本来の「民衆」はどこかに消失し、「自分たちの民衆」が生まれる。再現の繰り返しによって新しい意味が付与されるのである⁸⁹。そういう「民衆」は山岳風景に必須のアイテムであり、また登山者としてのアイデンティティを確認させてくれる存在であったから、かれらにとっては大事なものであると同時に、都合がよい存在、いうならば「風景としての民衆」であった。それゆえ保護されなければならないのである。「自然の友」協会は「ハイマート保護および自然保護」という協会活動の目的を1910年⁹⁰につけ加えている。同じ項目がビヒルの強力な押し

によってDuÖAVの定款に導入されたのが1927年だったこと⁹¹を考えれば、「自然の友」の方がより早く「ハイマート保護」を意識していた、ということになる。それはつまり、かれら自身のために「民衆」の保護が重要であり、翻って、自分たちの登山者としての存在意義を強く訴える必要があった、ということの意味していたのである。



クレンツヒェンの様子を示す絵葉書

(3) 登山

では、登山協会としての「自然の友」はどのような活動を行っていたのだろうか。

「自然の友」は山での登山者同士の挨拶に、「ベルク・フライ Berg frei!」という言葉を使用していた。これは「山を自由に」という意味であり、もっぱら貴族やブルジョアジーに専有されていた山や登山を労働者にも解放せよ、という含意があった。他のブルジョアアルペン協会が用いていた「ベルク・ハイル Berg heil!」(山よ万歳の意味)に対抗して発案されたもので

⁸⁸ *Der Naturfreund*, 1905, Nr.3, 27; Nr.7, 88; 1909, Nr.6, 131.

⁸⁹ Cf. S. Moranda, *ibid.*, 2-4.

⁹⁰ Schüglerl, *ibid.*, 28.

⁹¹ *Mitteilungen des Deutschen und Österreichischen Alpenvereins*, 1927, 224.

ある⁹²。こういった点からは「自然の友」協会
はブルジョアアルペン協会に対して明確な階
級的意識を抱いていたということは理解でき
るが、実際の活動においてブルジョアアルペン
協会とはどの程度のつながりがあったのだろ
うか。

各アルペン協会では秋から冬にかけての寒
い時期にはツアーが相対的に減少し、これに代
わって室内で楽しめる催しものが増加する。

「自然の友」協会もこれにもれず、スライド上
映や登山家や科学者による講演会などを支部
毎に週一回程度はかならず催していた。とりわ
け好まれていたのが、有名登山家による登山の
報告会である。その有名登山家の一人として、
ピヒルも 1901 年 1 月に招待されていた。「自然
の友」協会のロカールで行われた講演は「フェ
アファルのパテリオル北壁、初登攀」というも
ので、その内容は当時ピヒルが所属していた
ÖAK の機関誌『オーストリアアルペン新聞』
1900 年 570 号に詳細な記録として残されてい
る。そこでは、「困難な登山に立ち向かうこと
によって山の奥深くにある新たな力、何時終わ
るか誰にも説明がつかぬ無尽蔵なもの、それを
得ることができる。その力は内面の苦悩をうち
消し、わたしを自由で謙虚にする。(世俗的)

報酬は不必要となり、登山が自分の内面を豊か
にするものだとわかるようになる。それが登山
における急進主義だ」、と主張されていた⁹³。「自
然の友」協会は同じオーストリアアルペン新聞
に、「(頂上に着いて) 嬉しかったので一本の力
強い黒白赤 (=ドイツ帝国の国旗) の旗を振っ
た」⁹⁴という文章を書き、国粋主義的な態度を
既に明白に表明していたピヒルを招請したの
である。「自然の友」は翌年になって、ピヒル
を非常に難しいグロセ・ブフシュタインに登攀
した登山家として称賛しながら、「会員に興味
深い講演」をしてくれたと評している⁹⁵。

ところで、登山をした際の宿泊施設の利用権、
つまり小屋を所有しているアルペン協会の会
員と同じ割引料金で山小屋を利用できる権利
は、山小屋もなく、収入が限られた会員を主た
るメンバーにしていた「自然の友」にとっては
とりわけ重要であった。その権利は「自然の友」
協会に対して三つのアルペン協会 ÖAK(1898
年)、下オーストリア山岳協会 Der
Niederösterreichische Gebirgsverein⁹⁶ (以下 ÖGV
と略記) (1900 年)、および DuÖAV「オースト
リア支部」(1905 年)から与えられていた。ÖGV
は手工業者や下級官吏、小ブルジョアジーなど
を主たる会員として 1890 年に設立されたが、
その設立当初から会員を「ドイツ系」に限定し

⁹² 1900 年 3 月 14 日、グラーツ支部の総会で会員の一人
アロイス・シュネプフ Alois Schnepf によってシュタイヤ
ーマルク州の支部の挨拶として考案されたものだった。
これを本部が即座に全協会の挨拶として採用したので
あった (Der Naturfreund, 1901, Nr.5, 46)。

⁹³ Oesterreichische Alpen-Zeitung, 1900, 291.

⁹⁴ Oesterreichische Alpen-Zeitung, 1900, 125.

⁹⁵ Der Naturfreund, 1901, Nr.10, 92.

⁹⁶ 1904 年にオーストリア山岳協会 Der Österreichische
Gebirgsverein と名称を変更。

ており、入会者に厳しい制限がなされるような協会であった。ÖAK は設立当初から高山登山を専門とする登山業績重視、会員限定の協会である。つまり、「自然の友」は一方では高山登山・業績志向の、他方では「ドイツナショナル」な協会から、協会員と同じ会員割引を授与されていたのであった。これはそうした傾向をもつアルペン協会が「自然の友」をアルペン協会として認めたことを意味していた。

既に見てきたように、「自然の友」は「ナショナル」であることを忌避していない。他方、高山登山や業績登山も推進している。たとえば、1897 年に創刊されたばかりの機関誌『自然の友』の第二号に、当時最難関と目されていたグッハシュタイン・スートヴァントに、大胆不敵なロッククライマーとして有名だったヴェンガー Emmerich Wenger⁹⁷ を隊長とする若者パーティを送り込んだこと記載し⁹⁸、さらには同年の第四号にもホッホトア北壁登攀に挑んだ際の記事を載せ、1896 年に同じ北壁に挑んだ ÖAK のメンバーと達成時間を競った様子を描いている⁹⁹。翌年の 6 月号には通常だと 19 時間かかるヴィーンシュニーベルク間をヴェンガーが 15 分の休憩のみで 4 時間で走破したという記事がある¹⁰⁰。この一連の行動は新会員募集のための宣伝だったのではあるが、「自然の友」

協会でも競争が行われていたことは間違いなく、さらに後者の競争に関しては勝者に賞金が出されることにもなっていた。ヴェンガーらはこの賞金を雑誌の宣伝用に使うようにと協会に返したのではあったが¹⁰¹、協会としては賞金付きの競争を行なう方を向いていたといっ

「自然の友」協会は自然科学の知識習得を重視する小学校教師、フライデンカーの社会民主党員であり、社会衛生問題を解決しようとする社会政策家であったシュミードゥルによってその基本的性格が与えられた。しかし、社会衛生の改善という観点から出発した遠足・娯楽・登山が、実際には他の意味を帯びようになっていた。遠足活動には娯楽という要素が強くてきており、「民衆生活の知識・習俗を広める」という協会の目的に沿って「ドイツナショナル」なものの観光対象になっていた。娯楽活動はクレンツヒェンにみられるように、「民衆」や「山」を演ずる場であり、そうすることによって登山者としての意識を再確認する機会となっていた。いわば登山という高級文化への橋渡しの役割を担っていたのである。他方、登山活動は「自然の友」協会がアルペン協会として他のブルジョアアルペン協会と互角に闘う場であった。「自然の友」協会は一方では社会民

⁹⁷ 当時ヴェンガーは「自然の友」協会の道路建設グループの書記を務めていた。

⁹⁸ *Der Naturfreund*, 1897, Nr.2, 1-2.

⁹⁹ *Der Naturfreund*, 1897, Nr.4, 1-2.

¹⁰⁰ *Der Naturfreund*, 1898, Nr.6, 31-32.

¹⁰¹ Happisch, *ibid.*, 28-29.

主党の文化組織として党との関係を調整しつつ、他方ではブルジョアアルペン協会との交流をも図りながら登山活動を行っていた。設立からおおよそ 10 年間は「自然の友」と党およびブルジョアアルペン協会との結びつきはともに緩やかであり、社会的にみて大きな対立や衝突が表面に現れることはなかったといつてよいであろう。では「自然の友」が山小屋をもち、組織を拡大していく時期はどうであろうか。次章ではその展開をみていくことにする。

3. 「自然の友」協会の発展

「自然の友」協会は、1906 年第四回大会においてその定款に「自然科学の知識を広めること」、その手段として「自然科学的遠足を遂行すること」という項目を付け加えた。これはシュミードゥルによって提唱された「自然科学的知識の普及」というもう一つの協会設立目的を具体化したものであるが、これは何を意味し、そしてなにゆえ必要になったのか。この疑問を念頭におきながら、以下、協会の組織的拡大と政治状況の変化による「自然の友」協会の方針転換について検討していく。

3-1 組織

「自然の友」協会の会員数はその設立年の 1895 年末には 191 名であったが、五年後の 1900 年にはその 10 倍、1914 年には 31800 名と 160 倍以上に増加する。1897 年に 3 つの支部ができ、1903 年にはその数 26、1905 年にはスイスのチ

ューリヒとドイツのミュンヘンに国外支部がおかれるようになった。第一次世界大戦開始以前にアメリカ合衆国やフランスにも支部が形成され、支部の数は 250 を上回っていた¹⁰²。

本部と支部の関係における大きな特徴は、会員が専らヴィーンで増加したために、ヴィーン本部の会員数が圧倒的に多かったということである。たとえば 1902 年 6 月時点で 15 の支部を併せて会員 913 名であるのに対して、本部ヴィーンは 1897 名となっている。つまり、全会員の三分の二はヴィーンが占めているということになる。機関誌もヴィーンで発行され、専らヴィーンの商店の広告が掲載されていた。こうしたヴィーン中心主義は本部と支部の実務レベルにおいても示される。隔年開かれる「自然の友」協会の大会は本部と支部が対する場であったが、そこにおける評決の仕方は支部一票ではなく、会員数に比例して票が配分されていた。つまり、本部の意向が評決に直接的に反映される仕組みになっていたのである。本部はその方針と意向を伝え、それに対して支部は不平不満を述べ、様々な要求を行なうが、本部はこれをほとんど認めなかった¹⁰³。

¹⁰² Pils, *ibid.*, 32; 44; 65.

¹⁰³ Touristen-Verein "Die Naturfreunde" Protokolle der III Vereins-Konferenz zu Wien, April, 1904, 34.たとえば道路票をつくるために、支部に対して財政援助せよと要求すれば、年会費が少ないといい、それなら年会費をあげよ、という、それは貧しい会員もいるのでできないと返答する。機関紙に全支部の詳細な遠足計画を載せよという要求には紙面が不足しているから無理だ、と答えるような具合であった (Protokolle der II Vereins-Konferenz zu Leoben, 1902, Rundschreiben, Nr.2, 7-9)。

3-2 小屋割引料金

「自然の友」協会の各支部が設置された諸都市には既に DuÖAV などの支部が存在していた。それゆえこうした場所では「自然の友」の進出によって軋轢が起こる可能性があると同時に、他協会の支部との間に協力関係が成立する場合もあった。

1900 年代初め「自然の友」が直面した大きな問題の一つが各アルペン協会の山小屋を会員割引料金で利用できるか否かというものであった。会員は「自然の友」協会会員であることの利点を求めて入会するのであり、その利点として最大のものが他のアルペン協会および各支部所有・管理の小屋利用権だったのである。この問題が表面化するのには支部が増加した 1904 年の「自然の友」大会からであり、このときフィーラハ、レオーベン、シュタイヤの各支部から割引料金の適用や、小屋の鍵を「自然の友」にも渡すよう本部が各アルペン協会に交渉するべきである、という動議が出されている。同時に「自然の友」協会の小屋を設立するための基金を作るべきだ、という提案も行われ、ともに本部に交渉を委任する決議が行われた¹⁰⁴。しかし、ヴィーン本部はこれにあまり乗り気ではなく、既に割引料金の適用を受けている ÖAK の 3 つの小屋、ÖGV および近い時期に割引料金で利用できることになっているオース

トリアツーリストクラブ Der Österreichischen Touristenclub (以下 ÖTK と略) の小屋から適用される割引で我慢すべきであるとし、各支部の自己努力で同じ町の他のアルペン協会支部に友好的態度をとり、信頼関係を築いていくように促す。本部はとりわけ DuÖAV との関係に悲観的であり、いくつかの支部とは友好関係をもってはいるが、理想的な形で割引料金が適用される見込みはない、と断言していた¹⁰⁵。ところが同年 9 月、ボーツェンで開かれた DuÖAV の大会に「自然の友」協会会長ローラウアーが初めて招待され¹⁰⁶、また 1905 年 1 月には同協会で最大の所有小屋数を誇る「オーストリア」支部から会員同様の小屋料金割引の適用が許可される。これを「自然の友」ヴィーン本部は非常に喜び、雑誌に特別なコラムをもうけて会員に報告した¹⁰⁷。しかし、この喜びも束の間、「自然の友」協会には敵意が向けられるようになる。

3-3 特集「禁止された道」

1904 年の大会で決議された「自然の友」協会独自の小屋づくりについてはヴィーン本部が中心となってさっそく場所探しが行われた。その作業が進行中であることは 1905 年 1 月号のコラムで紹介され¹⁰⁸、4 月号では小屋建設予定地インスブリュックのパダスターヨッホの様

¹⁰⁴ Touristen-Verein "Die Naturfreunde" Protokolle der III Vereins-Konferenz zu Wien, 1904, 9-14.

¹⁰⁵ Ibid., 9-10; 46-47.

¹⁰⁶ 1904 年 12 月の総会で非常に喜んで報告している (Der Naturfreund, 1905, Jg. 9, Nr. 1, 7)。

¹⁰⁷ Der Naturfreund, 1905, Jg. 9, Nr. 1, 5.

¹⁰⁸ Ibid..

子が描かれ¹⁰⁹、5月号で正式に小屋建設場所が決定した旨の報告が行われた¹¹⁰。4月17日の臨時総会で建設期間は3年、1907年7月末までに完成することが報告されている¹¹¹。しかし、この4月から5月の段階で、「自然の友」協会がインスブリュックの山中に山小屋をつくることに反対する別のアルペン協会会員の投書が行われるようになる。これに対して「自然の友」は誌上で協会会員外のものが内部の決定事項に干渉するのは理に反していると批判し¹¹²、対決する態度を示していた。しかし、翌年の1906年4月初頭の「自然の友」協会大会においては、既にティロール地方のDuÖAVとÖTK各支部がその会員以外には割引料金を適用しないという方針をとっている旨の報告があり、それにどう対処するか議論が行なわれている。

小屋や道路を作るという行動は非常に煽動的であるゆえ、他の支部にその影響が及ばぬように予防しなければならず、そのためには小屋づくりを進めない方がいいのではないかといった意見、こちらがボイコットをすれば、小屋の利益を損ねることになるから、向こうから折れてくる、それを待つべきだ、あるいは「階級的立場にたったブルジョアツーリスト協会の自己中心的な態度に対しては堂々と反対の意を表明するべきだ」という意見までだされてい

る。しかし、支部によってはよい友好関係を維持しているところもあるゆえ、その関係を損ねないように配慮すべし、という本部の意向にそって、小屋の建設が続行されることになった¹¹³。

ところが、同年9月ライブチヒのDuÖAV大会で「会員以外が小屋を利用する場合には会員の倍の料金を支払うこと（＝割引料金の不適用）」という決議¹¹⁴が行われてしまう。この大きな決定を受けてÖTKも割引料金適用をはずし、その結果「自然の友」が利用できる小屋が減ったのであった。

こうした事態に対して、既に他のブルジョアアルペン協会と友好関係を維持する方針を決定していた「自然の友」はまず、その機関誌に一つの特集を組む。それはDuÖAVの大会と対抗するように、同年9月に開始され1919年7/8月号まで断続的に掲載される「禁止された道」という一連の記事である。「禁止された道」というタイトルは、登山道が山林保有者によって通行禁止にされた事態を表しており、その内容は山地の自由通行権をめぐる山林保有者とアルペン協会の間に生じた対立に「自然の友」協会がどう取組んだのかについての記録であった。

山地保有者は自らの所有地で自由に狩猟権を行使することができるようになっていたの

¹⁰⁹ *Der Naturfreund*, 1905, Nr.4, 37-41.

¹¹⁰ *Der Naturfreund*, 1905, Nr.5, 49-54.

¹¹¹ *Der Naturfreund*, 1905, Nr.8, 94-98.

¹¹² *Der Naturfreund*, 1905, Nr.5, 59; Nr.6, 73.

¹¹³ *Protokoll der IV. Konferenz des Touristenvereins "Die Naturfreunde"*, 1906, 10-14.

¹¹⁴ *Mitteilungen des Deutschen und Oesterreichischen Alpenverein*, (=以下 MDuÖAV と略記) 1906, Nr.20, 243.

で¹¹⁵、資本主義経済の発達とともにその所有者数は増加し、19世紀末には狩猟権を貴族が占有していた時代に比べて狩猟は盛んに行なわれていた¹¹⁶。加えて資本主義経済の発展と鉄道路線の拡大、産業技術の急速な進展に伴う生活環境の悪化によって、野外でのレクリエーション欲求が高まり、登山や遠足をする人びとも増加している。この両者が衝突したところに生じたのが「山地での自由通行権闘争」であった。「自然の友」はもちろんレクリエーション目的での自由通行権を求める側につく¹¹⁷。

「自然の友」の取組みは、山での自由通行権を他のアルペン協会と同等の立場で、しかもかれらと協力しながら権利を要求するという点を主張しているのが特徴であった。まず、「自然の友」にも頼りになる社会民主党党員の国会議員がいることを示唆した後、かれらが帝国議会で行なった質問の様子を描写するなど、「われわれも国政レヴェルでの力があるのだ」ということを提示する。そして、1907年の帝国議会選挙における普通選挙制度の導入によって一

般の労働者にも参政権が付与されたことを受けて、「自然の友」は通行権を民主主義時代の「国家公民 Staatsbürger」の権利として捉える。そして「封建時代さながらの貴族とブルジョアジーによる特権享受は許されない」¹¹⁸と訴えると同時に、法律家に依頼して自由通行権の法源や立法可能性についての論文を記事にする¹¹⁹。こうして自分たちが正当な権利を要求する立場にあること、そして「自然の友」協会が国民経済を支えるツーリズム¹²⁰を促進し、全住民の健康や公共の福祉を向上させることを考慮している点を強調した¹²¹。さらに特集の第一回から DuÖAV や他のアルペン協会とは支部レヴェルでも相互協力を行ない、この自由通行権問題についてともに闘っているのだ、という様子を繰り返し描いている。

こうした描写を通して読み取れるのは、読者である会員に、一方では「自然の友」協会が一人前の国民としての権利を有する人々からなるアルペン協会であることを訴え、他方では、他のアルペン協会と上手に付き合っていくよう示唆した「自然の友」の姿だった。

しかし、状況は悪化し、「自然の友」協会は別的手段を使って、ブルジョアアルペン協会との友好を保たなければならなくなる。

¹¹⁵ 1848年9月の土地解放令を基礎にした1849年3月7日勅令によってそれまで貴族の特権であった狩猟権は土地所有者のものになった（*Kaiserliches Patent vom 7. März 1849*）。

¹¹⁶ 高山狩猟における捕獲量は例えばアカシカが1880年に比べて1910年には3倍、狩猟区面積も1900年から1910年にかけて57万ha拡大、大貴族が所有していた500ha以上の狩猟区数の増加に比べて資本家階級が所有する中小狩猟区の増加数は約5倍となっている

（*Österreichisches Statistisches Handbuch*, Jg.35, 1916-1917, 108-110）。

¹¹⁷ 「山地での自由通行に関する法律」は1920年代にザルツブルク州他いくつかの州で認められ、国法レヴェルでは1975年の森林法によって初めて制定された。Cf. Michael Malaniuk, *Österreichische Bergsportrecht. Der freie Zugang zur Natur* (Wien, 1997), 41; 81.

¹¹⁸ *Der Naturfreund*, 1906, Nr.9, 138-139; 156.

¹¹⁹ *Der Naturfreund*, 1909, Nr.7, 144-150; Nr.8, 177-182.

¹²⁰ 当時の文脈での「ツーリズム」という言葉には通常の観光という意味だけではなく、登山の意味が強く入っている。文脈によってはもっぱら登山の意味だけに使われる場合もある。

¹²¹ *Der Naturfreund*, 1906, Nr.9, 156; Nr.11, 175.

3-4 政治的立場の表明

1908年6月7日、インスブリュックで行われた第五回「自然の友」協会大会において「インスブリュック決議」という一つの秘密原則がもうけられた。それは、協会をあげてあらゆる機会にオーストリア社会民主党の立場を明示してアジ活動を行ない、さらに未組織者に入会を促して政治的敵対者が入会するのを阻止し、幹部は党員に限定すること、という内容をもつものだった¹²²。

協会がその政治的立場を表明することに対して、「自然の友」はあくまでアルペン協会であって政治組織ではないのだから、政治活動を行うべきではない、との反対意見もだされたが、ウィーン本部は「組合運動のことを配慮するなら職務を放棄して無関心な態度をとってはならない」「政治活動を誇示する必要はないが、それがどうしても必要な場合がある」として強引に決議を強行する¹²³。

その背景には、チェコ労働組合の分離によるドイツオーストリア労働組合員の減少を補う必要性と選挙向けの政策も絡んで、党の組織替えが行われ、「自然の友」を含む文化組織をも規律化し、また党員の拡大をはかる方針がとられるようになったという事情があった¹²⁴。

¹²² Protokoll der V. Vereins-Konferenz des Touristenvereins "Die Naturfreunde", 1908, 42.

¹²³ Protokoll der V. Vereins-Konferenz des Touristenvereins "Die Naturfreunde", 43-44.

¹²⁴ Wolfgang Madaerhaner, Die Entwicklung der Organisationsstruktur der Deutschen Sozialdemokratie in Österreich 1889 bis 1913, in: ders., (Hg.), Sozialdemokratie

こうした政治的立場表明に対しては二つの方向から批判が開始された。一つは国外のブルジョアアルペン協会であるスイスアルペンクラブから「自然の友」協会がその支部をスイスに広めていること、「ノイトラール (=中立)」であるべき山の世界に階級にもとづく政治性を持ち込むことに対してなされた批判である¹²⁵。もう一つは 1909 年夏、国内の国粋主義系の新聞によってなされたもので、「自然の友」協会員が登山のルールに反する行動、花を根こそぎむしり取り、山で大声をあげ、石を持ち去るなどの行為をする一方で、チェコ系ナショナル運動を援助しているという批判であった。

前者に対しては「自然の友」協会がオーストリア内では他のすべてのアルペン協会との友好関係を保っていることを挙げ、後者に対してはこれを「われわれに対する攻撃である」として『自然の友』誌上で反論する¹²⁶。しかし、同時に『自然の友』誌は協会会員のツーリストとしてのマナーの悪さを指摘し、かれらを啓蒙し人間の教養を高めねばならない、と主張し始める¹²⁷。それは、協会がこれまでに会員に対して

und Habsburgerstaat (Wien, 1988), 49; ders., Das Entstehen einer demokratischen Massenpartei, in: ders./W.C.Müllers (Hg.), Die Organisation der Österreichischen Sozialdemokratie 1889-1995 (Wien, 1996), 52-54. Cf. 小沢弘明「オーストリア社会民主党における民族問題-『小インターナショナル』の解体と労働組合-」『歴史学研究』No.572 (1987), 19-38.

¹²⁵ その批判は 1909 年第 1 2 号から 5 回にわたって機関誌『アルピナ』に掲載された (Alpina, 1909, Nr.12, 113; Nr.14, 128-129; Nr.15, 135-136; Nr.16, 142-143; Nr.17, 152-153)。

¹²⁶ Der Naturfreund, 1909, Nr.9, 233.

¹²⁷ Der Naturfreund, 1909, Nr.7, 159.

採ってきた態度に較べると、口調は厳しくより啓発的になっていた。ツーリストとしてのルールに従うことのできない会員を擁していることはアルペン協会として恥すべきことだったからであり、他のアルペン協会との友好関係を願うとき、あつてはならないことだったからである。

3-5 競争的スポーツの否定

会員に対する態度の変化は別の面にも現れていた。それがウインタースポーツなどの競争的スポーツに対する「自然の友」協会の態度である。

「自然の友」では1905年12月に最初のスキー練習会が催され、1907年2月にはウインタースポーツ祭りを開催、1908年3月にティロールで開かれたウインタースポーツ祭に「自然の友」が招待され、その勝者の多くが「自然の友」会員であったことを『自然の友』誌に報告し、スキーやリュージュの各競技会における勝者やその記録を詳細に掲載している。当初は競争を進めて、ウインタースポーツを盛んにしようとしていたのであった。その態度は1909年11月号まで続く¹²⁸。しかし、翌年の1910年3月号からその調子に変化する。スキーの滑走はスピードを競う競技用のノルウエー方式よりも、冬の景色を楽しむためのリリエンフェルダー

式にすべきであるとし、同じ号の別の頁には「自然の友」のなかでも距離ばかり追いかけ、名誉心や功名心を求めて登攀し、山中で走り回ることばかりに気をとられている人々が増加していることを嘆く記事が掲載されている。

「肉体訓練や業績を上げることで人間は成長するのだから、それに価値を置かないわけではないが」、自然科学的知識の習得が疎かにされると、教養あるツーリストにはなれないと述べ、競争的スポーツに対して否定的な態度をとり始めたのである¹²⁹。また、1910年5月号にはDuÖAV会誌の「ウインタースポーツを行う人々のマナーが悪く、小屋を汚している」という記事を転載し、冬場にスキーをする人々はマナーを心得たツーリストであることを忘れ、自分の利益だけを考えている、との批判記事を掲載した¹³⁰。そうして1911年3月号において、「自然の友」協会は以後、機関誌にウインタースポーツの各種競技に関する記事は一切掲載せず、会員はそうした催事には参加しないようにとの勧告がなされるに至る。「自然の友」協会のこの決定を促したのはDuÖAV ニュースレター（1910年10月31日付）に掲載された「オーストリア支部」所属のラマーの文章であった。スピードや勝利することのみを求める競争は自然に直接ふれることによって初めて得られる感情を失わせる、そうしたあり方はアルピニズ

¹²⁸ *Der Naturfreund*, 1905, Nr.1, 11; 1907, Nr.3, 53; 1908, Nr.5, 112; 1909, Nr. 1, 15; Nr. 11, 257.

¹²⁹ *Der Naturfreund*, 1910, Nr.3, 76-79.

¹³⁰ *Der Naturfreund*, 1910, Nr.5, 128.

山の本来的なものではないゆえ、山で行われる競争スポーツはこれを原理的に拒否すべきである、という内容である。「自然の友」協会は「われわれはラマー教授と同じ立場に立っており」、かれの文章に刺激されて競争的スポーツ掲載禁止の決定を下したのだ、ということをはっきり述べている¹³¹。

「自然の友」協会本部によるこの競争的スポーツの禁止宣言が意味していたのは、「自然の友」協会がこれよりさき、DuÖAV「オーストリア支部」と共に歩むという方向を選択したということであった。こうすることによって、実利面では、「オーストリア支部」の小屋全体を割引料金で利用できることになる。さらに、「オーストリア支部」は数あるアルペン協会のなかで最も学問・教養を重視する支部として名の通ったところであった。協会員の教養を高めようとする「自然の友」にはこの点においても適していた。一方、同じ頃ピヒルは「ローマからの脱退運動」に加わる¹³²など、「オーストリア支部」やそこに属すラマーと対立しており、「学術支部ヴィーン」においてはより鮮明な国粋主義的態度を示していた。同じ国粋主義系新聞による「自然の友」への非難も増しており、これを「自然の友」が嫌っていたこともその理由のひとつだろう。一方、「自然の友」がラマーを好ましく思ったのはその思想的立場によると

ころが大きい。かれは「社会主義的労働者大衆」が登山を志すことを受容し、産業主義、大都市文明が人間性を破壊することに批判的であり、また自然にふれることによって人間個性の調和的發展を促進させるという立場に立っていた。ギムナジウムの教授でもあったかれは登山を一つの人間形成のための訓練、心身の発達を促すものと考えていたのである。自ら山案内人なしの高山登山を切り開いた登山家としての経験から「強き自我による相手なしの競争、報酬を当てにしない闘いが自己形成の源になるのだ、その体験は労働者一般大衆にも開かれているべきだ」と主張している¹³³。では、同じく高山登山を主張していたピヒルとの思想的立場の相違はどこにあるのか。一番大きな違いはピヒルが反ユダヤ主義的立場に立っていたことである。戦間期にピヒルがユダヤ教徒を隔離するために作った「ドナウラント支部」でラマーは講演もし、機関誌に文章も書くなど、親ユダヤ教徒の立場に立っていた¹³⁴。また、ピヒルは山に宗教的神聖さを求める傾向があるが、ラマーはそれをしない¹³⁵。ラマーによれば「わたしの宗教は唯一、自己破滅寸前まで人間性を思うまま発揮すること」¹³⁶である。つまり、ラ

¹³¹ Eugen Guido Lammer, Zur Psychologie des Alpinisten, in: *MDuÖAV*, 1908, 47-48; Amstädter, *ibid.*, 93-99.

¹³² Martin Walkner, Zur Entstehung des modernen Alpinismus im Wien des Fin de Siècle. Die Bedeutung von Eugen Guido Lammer, in: *Zeitgeschichte*, Jg., 23, Heft 9/10, 1996, 292.

¹³³ Amstädter, *ibid.*, 137-138.

¹³⁴ M. Walkner, *ibid.*, 297.

¹³¹ *Der Naturfreund*, 1911, Nr.3, 20-21.

¹³² 1911年にピヒルはこの運動に加入している。

マーはあくまで人間の理性で感情を抑えることに重きを置くが、ピヒルは人間ではないもの、山から生まれる神秘を重視して、それに決定を委ねようとする。そこに大きな違いがあった。

「自然の友」はこのラマーの理性による決定の方向を選択したのである。それはキリスト教的支配から脱して理性にもとづく自然科学を信奉するフライデンカーからなる「自然の友」の方針に一致していたのであった。

3-6 自然保護と博物学

では、「自然の友」協会の自然保護に対する態度はどうだったのか。設立当初シュミーデルによって「大量の花を摘み取ってはいけない」と言われていたが、協会員はそれを守ってはいない¹³⁷。会長のローラウアーさえ花摘みを行い、シャクナゲやエーデルワイスを探しに行くのが目的とさえ思えるような遠足・登山記録が残っている¹³⁸。アルペン植物の保護が訴えられるようになってはいたが¹³⁹、協会員に対して積極的に自然保護を訴えるのは、1909年10月26日、ヴィーン支部¹⁴⁰の講演会でシュミードゥル自ら「近代人と自然」という博物学の講演を施してからである。そこでは、地球誕生から生命

の発生や自然科学の発展の歴史が述べられ、宗教の欺瞞性が指摘され、科学的理論をきちんと把握し合理的に自然観察を行なうことによって、因習的なものの考え方を改める必要があると説かれる一方で、近代人は自然観察を行ってそこから生物相互の、そして人間相互の共存を学ぶことが主張された¹⁴¹。これは同年夏から開始された「自然の友」協会会員のマナー違反に対する批判を受けてのことであつたのだろう。シュミードゥルの指揮で、自然科学の知識を得ることで他との協調を学ばせようと、翌1910年1月からヴィーン博物学支部が設立された。同年3月号にはその開催の言葉として次のように記されている。

「記録狂いの競争的登山、自己中心主義を自然観察によって抑制すること、人間が他の人間と共にあることを知り、他人の存在を無視して行われる意味のない競争の愚かさを認識すべきである」¹⁴²。

『自然の友』誌1910年6月号は自然を「無思慮や野心、教養の欠如から」軽蔑してはならず、「普遍的な財である自然を保護すべきである」ゆえ、「大量に花を採ってはならない」と記し、同年5月に催された第六回大会において定款に「自然保護とハイマート保護」が追加される。さらに、1911年1月号にはアンジェロ・カラロ

¹³⁷ *Der Naturfreund*, 1900, Nr.5, 42-43.

¹³⁸ *Der Naturfreund*, 1900, Nr.8, 74.

¹³⁹ *Der Naturfreund*, 1901, Nr.8, 72-73 の「エーデルワイスの保護」という記事が初めての高山植物保護の記事である。1908年8月号ではエーデルワイスを求める人々を「悪い人間」と見なしている (*Der Naturfreund*, 1908, Nr.8, 179)。

¹⁴⁰ 1908年の大会において本部とヴィーン支部が分離した。

¹⁴¹ *Der Naturfreund*, 1909, Nr.12, 272-275.

¹⁴² *Der Naturfreund*, 1910, Nr.3, 79.

Angelo Carraro¹⁴³の筆によるヴィーン博物学支部の課題と目標「ツーリストと博物学」という論説が掲げられて、博物学の知識がない登山者はツーリストにはなれず、登山と自然科学の知識が一体となっはじめてツーリズムが完成されると主張されている。加えて 1913 年の第七回大会では、「自然科学の知識に基づいた人生観や世界観」をもつべきことが謳われ、自然保護を全員に促すこと、自然を損なうような行為をするものには警告する、という決議が行われるに至った。

「自然の友」協会の目指した自然保護はこのように、博物学を中心とした自然科学に基づく教養としての自然保護であり、他のブルジョアアルペン協会との善き関係を維持するために編み出されたものであった。その端緒は協会の定款に「自然科学の知識を広めること」「自然科学的遠足」という項目が導入され、同時に小屋の割引料金適用の撤廃問題が議論され、ブルジョアアルペン協会との関係を損ねないような方向が決定された 1906 年の大会にあった。その自然科学の知識を利用した協会運営が具体化されて、博物学支部が誕生し、競争的スポーツ禁止策となるのである。

終わりに

オーストリア＝ハンガリー二重君主国において進行していた「国民社会」形成の途上に「自然の友」協会は設立された。それゆえ「国民社会」の形成という歴史的事象から派生する様々な性向が「自然の友」協会に付与されていた。シュミードゥルによって考えられていた協会の設立目的は当初、労働者の社会衛生の改善と自然科学的知識の普及であった。これらを実現するために遠足、娯楽活動や登山がおこなわれていたが、実際には所期の目的とはかなり異なるものとなっていた。遠足には娯楽的要素が強く含まれており、「民衆生活と民衆習俗の知識」を広げるという目的を実現するにあたっては「ドイツナショナル」な観光対象にも接近しており、無意識のうちにその支配意識となって表れていた。一方、娯楽活動は「山」や「民衆」を自分たちで再現する場となっており、登山者としての自意識を高めていた。同時にそれは、ブルジョアアルペン協会からなる高級文化を模倣することにもなっており、「自然の友」協会を通して、協会員が高級文化に接する場でもあった。

他方、資本主義経済の進展による競争主義的思考は、登山方法そのものに入り込んでいたが、

「自然の友」は当初それを是認していた。ところが協会がその規模を拡大する一方で、大衆政治運動が推進されて社会民主党による「自然の友」協会への支配が強まると、他のブルジョア

¹⁴³ (1861 年～没年不明) 専科教師、フライデンカー、シュミードゥルの友人。自由同盟文化協会(1919 年成立)や社会教育協会(1912 年成立)、オーストリアフライデンカー同盟(1921 年再建)の幹部を務め、『自然の友』誌に自然科学の文章を長きにわたって記す (F. Stadler, *Spätaufklärung*, 447, 456, 460)。「自然の友」はカラロを「民衆・人類の友、哲学者」(*Der Naturfreund*, 1921, Nr. 5, 69)と評している。

アルペン協会との軋轢や対立が生じてしまう。これをなんとか和らげ、諸ブルジョアアルペン協会との関係を維持するために、持ち出されたのが協会員に自然科学を勉強させることであった。自然界での生物の共存関係をもとに、それを人間社会にも応用して、他と協調することを教えようとする。つまり、協会運営を円滑に行なうために、自然科学の知識を通して協会員を啓蒙し、登山やスポーツにおける競争・業績志向を克服しようとしたのである。これが「自然」による啓蒙という手法であった。

戦間期オーストリアの社会民主党陣営においてスポーツ・文化政策の中心となる「オーストリア労働者スポーツ・身体文化同盟 Der Arbeiterbund für Sport und Körperkultur Österreichs」の会長や指導部に「自然の友」協会の首脳陣が名前を連ねるなど、「自然の友」協会は 1920 年代には社会民主党のスポーツ文化組織として大きな役割を果たす。その点から、「自然の友」も「連帯と労働者階級の解放」という党の方針に沿う活動を担っていたことは確かである。しかし、設立当初から 1910 年前後までの時期においてはアルペン協会としての登山活動を行なう上で、むしろブルジョアアルペン協会との関係が重要であり、それらとの「連帯」が模索され、実際にそういう方向で活動が行なわれていたのであった。

しかし、「自然の友」協会がその方針を 1910 年前後の時点で採用する際に、一つの選択が行

なわれていたことに注意が払われなければならぬ。それは「自然の友」協会が、ユダヤ教徒の教養市民層がその多くを占める Du.ÖAV「オーストリア支部」を選び、これに対立する国粋主義系のアルペン協会とは決別した、ということである。この両者との関係が戦間期「自然の友」協会の活動を規定し、進む方向を定めていく。それが社会民主党陣営内での「連帯」とどのような関わりをもつようになっていくのかについては稿を改めて論じたい。

(ふるかわ たかこ・東京外国語大学大学院博士後期課程)